宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第７回
第３章　あまんきみこさん
その１　『車のいろは空のいろ』

あまんきみこさん（1931 年～）と母宮川ひろ（1923～2018 年）は、同人誌『どうわ教室』（1966 年 4 月創刊）でいっしょに勉強した仲間だ。あまんさんは、母より８歳年下だが、母が亡くなるまで、50 年あまりも、ずっと友だちでいてくださった。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがある。

春夏秋冬のおはなし

2009（平成 21）年、三省堂から『あまんきみこセレクション』全５巻（後路好章・宮川健郎編）が刊行された。私も、編者のひとりである。編者と三省堂編集部の担当者たちで、その時期までのあまんきみこの全著作を読み直して編集した。たとえば、『おててぱちぱち』にはじまる『あまんきみこのあかちゃんえほん』全 10 冊（上野紀子絵、ポプラ社 1983～84 年）のようなものは収録がむずかしかったが、全作品の７～８割を収めたのではなかったか。

『あまんきみこセレクション』の第１巻から第４巻は、『春のおはなし』『夏のおはなし』『秋のおはなし』『冬のおはなし』。あまんきみこの童話を春夏秋冬にわけて、四つの巻に収録した。あまんさんの童話は季節感が豊かで、全部を春夏秋冬に分類することができた。デビュー作『車のいろは空のいろ』（ポプラ社 1968 年）などの連作も、それぞれの話の季節によって、別々の巻に収録してある。各巻末には、解説のかわりに、あまんさんとゆかりの人の対談を掲載した。「春のお客さま」は西巻茅子さん、夏は岡田淳さん、秋は江國香織さん、冬は宮川ひろである。

『セレクション』の第５巻は『ある日ある時』、あまんさんのエッセイから 58 編を選んで編集した。

『あまんきみこセレクション　冬のおはなし』巻末のあまんさんと母の対談は、2008（平成 20）年２月 24 日にわが家で行われた。お住まいのある京都から大雪のなかを上京された、あまんさんをおむかえした。

対談は、あまんさんが第１期生、母が第２期生として学んだ、日本児童文学者協会主催の「新日本童話教室」と、第３期までの修了生があつまって創刊した同人誌『どうわ教室』のことからはじまった。『どうわ教室』が、ふたりが出会った場所だったのだ（連載第３回参照）。母が「同人誌の「どうわ教室」が出るまでは、やっぱり大変だったわよ。」「生原稿読み合ったりとか。ね。」といい、あまんさんがこたえる。（以下、「**あ**」があまんきみこ、「**宮**」が宮川ひろ。）

あ　そうそう。電話で読み合ったりしてた。高円寺で集まったり。
宮　そうそう。高円寺の東電サービスセンター。
あ　安かったのよね。

宮　うちのね、知り合いに、東電に勤めている方がいて……。無料だったのよ。（中略）

宮　でもあのころ一番燃えてたと思う。あの、ガリ版でへたくそな字で。うちに謄写版があったのよね。それでみんなに知らせたの。だって高円寺の東電の会場、いつも借りられるとは限らなくて。いろんな、高田馬場の東電とか、なんかあっちゃこっちゃにあって、会場おさえて、みんなに知らせるのがわたしの役で。本当にあのころ、一生懸命知らせたと思う。

あ　あー、ありがとうございます。

宮　うれしがって知らせてたと思うよ。みんなに会うのが楽しみで。

あ　ええ、楽しみだったからねー。

マジックペンで書かれたタイトル

あまんさんも母も、『どうわ教室』に作品を書く一方で、『びわの実学校』に投稿をつづけた。あまんさんの「くましんし」がはじめて『びわの実学校』第 13 号（1965 年 10 月）に掲載され、宮川ひろの「たからもの」がはじめて第 16 号（1966 年 5 月）に掲載された。

あまんきみこの作品は、「月夜の当番」（第 17 号）、「小さなお客」（第 20 号）、「走る」（第 22 号）、「山ねこおことわり」（同前）、「白いぼうし」（第 24 号）、「すずかけ通り三丁目」（第 26 号）とつぎつぎにのっていく。

「二十年近く前の或る日、今西先生から、お電話がかかってきました。童話雑誌「びわの実学校」に載せていただいていた「運転手松井さんの話」を集めてみては、ということでした。／「あと二、三作書けば一冊になるでしょう。」」――こう書き出される、あまんさんのエッセイ「今西祐行先生のこと」（はじめ、「思い出すままに」の題で『今西祐行全集』第２巻月報（1987 年 7 月）に掲載された。引用は『あまんきみこセレクション』第５巻による。以下同じ）に、このころのことが書かれている。

今西先生は、『びわの実学校』のあまんさんの担任の先生で、母とはクラスメートということになる。（注１）今西先生は、「これは、坪田先生からのお話ですよ。」ともおっしゃったという。校長の坪田譲治先生が「松井さんの話」をあつめて本にすることを考えたのだ。

やがて、あまんさんは、その本のタイトルを決める相談のために今西先生のお宅をたずねた。

「タイトルは、大切ですからねぇ。」

先生は、私が申し上げるタイトルの幾つかを聞きながら、もう一つ何かが足りないなあというふうに、首をかしげておられました。

「うーん、車の色は、何色でしたかねぇ。」

「空色です。空の色です。」

　そう申し上げると、先生は、大きく頷かれました。
「車の色は、空の色。車の色は空の色。それだ。それが、いい。」
　そうしてマジックペンで、白い用紙に枠を描かれ、その中に横字で「車のいろは空のいろ」と書かれ、その下に並べて小さく「あまんきみこ」と書いてくださいました。
　息をのんだまま、その二行の文字をじいっと見つめていた私は、
「どうでしょうね、これでは。」
　と、先生が笑顔をあげられたとたんに、大きなため息を、はーっとついてしまいました。

今西先生は、担任であるだけでなく、編集者でもあったのだ。（注２）

　そしてこの本が生まれた時、先生は、何もわからない私に、いろいろなことを教えて下さいました。本をお送りする先のお名前や住所などもみな教えていただきました。その上、夫の転勤で、すぐに仙台に引っ越していく私に、お祝いの会まで開いて下さいました。

あまんさんの『車のいろは空のいろ』（ポプラ社）の刊行は、奥付によれば、1968（昭和 43）年３月 15 日（たまたまだけれど、この日は母の誕生日でもある）、そのお祝いの会は３月の末に行われた。

12 歳の坂道

2024（令和６）年１月４日のあたたかい午後、私が３歳から 27 歳で仙台の大学に就職するまで 20 数年をすごした東京都板橋区の家のあたりまで行ってみた。東武東上線の下赤塚駅から川越街道を 10 分くらい下って、右へ少し入る。私が仙台で仕事をするようになって２年後に母が家を売って、現在のＪＲ中央線沿線の家に引っ越した。42 歳で東京の大学に異動したあと、近くまで行った機会に、もとの家の付近まで２度行ったことがあるのだが、それでも、６、７年ぶりである。
　建て替えられて、いまは別のお宅になっている、その前から、小さな、ゆるい坂道をのぼる。のぼりきって、左へ。ちょうど 100 歩ほどでＫさんのうちがあったところにたどり着く。Ｋさんのところも建て替えられて、まだ新しい３階建てのアパートだ。
　1968 年３月、『車のいろは空のいろ』の出版記念会の日の朝、私は、いささか憂鬱な気分で、この坂道をのぼった。私は 12 歳で、もう小学校の卒業式が終わり、４月はじめの中学校の入学式を待っている時期だった。私は、坂の上のＫさんのうちにタクシーの運転手さんのぼうしを借りに行かなければならなかった。Ｋさんは、個人タクシーの運転手さんだった。そのぼうしをかぶった運転手さんの扮装で、お祝いの会であまんさんに花束を差し上げることを母が私に命じたのだ。Ｋさん

ともおかみさんとも顔見知りだったし、母が下話をしてあることもわかっていたけれど、重たい気もちで出かけた。Ｋさんに、きちんとあいさつをして、ぼうしのことを改めてお願いしなければならなかった。いやがっても、母が絶対に許さないことは、母と 12 年も付き合っていればわかっていたから、しかたなく行った。坂道をのぼり、Ｋさんの家のまわりをぐるっと１回まわったあと、ようやく玄関を開けて、声をかけた。

胸のプレートは「春野タクシー」

出版記念会は、夕刻から行われた。

閉会にさしかかったころ、運転手の松井さんがあらわれて、会場中央の席のあまんさんに花束を贈呈した。松井さんは、左胸に、マジックで手書きした「春野タクシー」というプレートをつけた紺のジャケットの私だ。「春野タクシー」は、松井さんのつとめるタクシー会社である。朝、Ｋさんからお借りしたぼうしもかぶっていた。

花束贈呈のあとは、母とふたりで歌をうたった。会の司会をしていた今西先生がマイクを差し出してくださった。歌は、松井さんがはじめて登場した作品「くましんし」のなかで、熊野熊吉がふるさとの山をなつかしんでうたった歌である。「♪こたたん山の　くまたちは／人におわれて　人になる／こたたん　こたたん……」（引用は『あまんきみこセレクション』第４巻による。以下も同じ）という作中の歌詞に作曲をしたのは、わが家のおむかいの大学生、Ｓさんだ。ギター演奏が得意で、譜面をつくってくれた。素朴な曲調の歌だ。

出版記念会の会場は、神田にあった 10 階建てのビルの２階のレストラン「牡丹」、貸し切りだった。このビル全体の管理をする支配人が父だった。事業に失敗して職を転々としていた父が２、３年前にこの仕事を得て、わが家の経済は、少しだけ安定するようになった。ビルは、三重県四日市市に本社のある「Ｔ糖業」という、ぶどう糖をつくる会社が東京の拠点としてもっていたものだ。中央大学法学部（二部）の出身で、最初は都庁につとめた父は、消防法などにくわしく、ビル管理の仕事ができたようだ。

私は、出番が来るまで、レストランの厨房のわきの小部屋で父といっしょに控えていた。待っているあいだに、父とふたりで、店の自慢のビーフシチューをごちそうになった。ビーフシチューなんて食べたことがなかった。おいしかった。

会が終了したあと、父とふたりで帰宅した。この少し前、父が夕食のときに嘔吐したことがあって、これが病気のはじまりかと思うのだが（連載第３回参照）、この日は特に心配なこともなく、私は、ちょっと幸せだった。父の病気が悪くなって、仕事をやめるのは、１年あまりのちのことだ。

この日の母は、今西先生を手伝って、一生懸命だった。出版記念会のために、父にも私にも、近所のＫさんや大学生のＳさんにも協力をもとめた。仲間のあまんさんの最初の出版がうれしかったのだ。そして、いつか、自分も本が出せたらと願っ

ていたのだろう。母宮川ひろのデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）の刊行は、１年半ほどあとである。

そして、あまんさんは、出版記念会の翌日、お連れ合いの転勤にともなって仙台へ引っ越す。仙台で３年、福岡で３年、そのあとは、お連れ合いの勤め先の本社があった京都ですごすことになる。

「すべて長編の出だし」

『車のいろは空のいろ』には、タクシーの運転手の松井さんが登場する作品８編が収められている。８編のうち、『びわの実学校』に発表されたのが５編、「くましんし」「小さなお客」（「小さなお客さん」と改題されて収録）「山ねこおことわり」「白いぼうし」「すずかけ通り三丁目」である。私は、『びわの実学校』の誌面でみんな読んでいた。『車のいろは空のいろ』に書き下ろされたのが３編、「うんのいい話」「ジャポン玉の森」「本日は雪天なり」、母から本を借りて（見返しに「宮川ひろ様　あまんきみこ」と署名がある）、これも読んだ。

ふとバックミラーを見あげると、ねむりこけているしんしの顔が、まるで、くまそっくりに見えました。オーバーのえりを立て、ソフトぼうをななめにかぶり、くまの顔をしたしんしは、かすかな寝息をたてていました。

びっくりした松井さんは、もう少しでハンドルをきりそこなうところでした。

そのひょうしに、車はガタンと大きくゆれました。しんしは目をあけて、からだをおこすと、たばこに火をつけました。

バックミラーの中には、あたりまえの男の顔がうつっていました。松井さんはくまに見えたのは、目のまちがいだったのか、とおもいました。（「くましんし」）

松井さんは、バックミラーにうつる客の顔が、ふとクマになったように思う。このとき、松井さんの「日常」は翳りをおび、「非日常」がしのびこんでくる。『車のいろは空のいろ』は、「日常」という時が翳る、その瞬間をつかまえようとした連作集ではないか。――私は、そんなふうに考えてきた。（注３）

『車のいろは空のいろ』が刊行されたとき、たいへん批判的な意見を述べたのが古田足日である（「現代のファンタジィを（１）」『学校図書館』1968 年 7 月）。古田は、「あの本の作品はすべて長編の出だしだと思った」（引用は古田『児童文学の旗』理論社 1970 年による。以下同じ）といい、「くましんし」については、こう書いている。

くましんしのイメージは新鮮だが、タクシー運転手がそのくまと出あう、という創作方法はどうなのか。連続する人生の一部を切り取り、人生の一断面をのぞかせる、というこの方法は、過去の童話の方法であった。

くましんしに出あうのは物語の発端であり、そこから「何か事件がはじまるべき」なのである。そして、その物語の展開の中で、くましんしのイメージはより豊かに、よりあきらかになっていくはずだ。

古田は「くましんしに出あうのは物語の発端であり、……」と述べているが、これは、石井桃子他『子どもと文学』（中央公論社 1960 年）の「小川未明」の章をふまえている。（つづく）

（注）

1、あまんきみこは、『びわの実学校』への投稿時代をふりかえって、こう書いている。

投稿といえば、この言葉と「登校」が同じ音であることを知った時は、宮川ひろさんと喜んで楽しみました。

「私達は、『びわの実学校』に登校しているのよねえ。」

「これからも、登校させていただきましょう。」

などといって、書きたい作品や書いている作品のことを、長々と話し合いました。

（「『びわの実学校』と、私」『びわの実学校』第 134 号、1986 年 4 月）。

2、今西祐行先生は、実際に実業之日本社などで編集者として仕事をしていた時期がある。前川康男先生は新潮社の編集者だったし、『びわの実学校』の編集同人は、大石真、寺村輝夫、砂田弘、高橋健など編集者経験のある人が多い。

3、宮川健郎「時の翳り―あまんきみこ『車のいろは空のいろ』再読―」（『国語教育と現代児童文学のあいだ』日本書籍 1993 年所収）参照。